Japanese Association for Religious Studies



# 津城寛文著『〈霊〉の探究——近代スピリチュアリズムと宗教学——』

春秋社　二〇〇五年一〇月三〇日刊
四六判　ix＋二七二頁　二五〇〇円＋税

吉永進一

本書は、すでに『鎮魂行法論』などで日本の霊的宗教運動の研究を行なってきた著者が、十九世紀末から二十世紀前半における欧米のスピリチュアリズムや心霊研究の成果を、宗教学との連関、死後存続問題という二つの観点から論じた、ある意味挑戦的な研究である。

ここで「挑戦的」と評したのは、本書の「はじめに」で、著者は知識人のスピリチュアリズムに対する「加害者責任」を追求しているからである。世論調査などによれば、死後存続などの〈霊〉に関する主題を肯定的に考える者が全人類の半数はいると推定される。しかし現況では、知識人の間を中心に半数を占める否定論が支配的となり、その他半数の人々が奉じる信仰を迷信、誤謬などとして抑圧している。しかも宗教学は、「学問領域としては唯一、〈霊〉という主題を包括的に扱う資格と能力をもっている（はずの）」学問であるのに、なぜか〈霊〉の問題を軽視してきた。宗教学の成立時期がスピリチュアリズム、心霊研究の流行と同時であり、宗教学の比較研究を行なう作業場を確保するために、〈霊〉という問題を排除したという理由があるにしても、宗教の基盤信仰を問う最良の機会を失ったことは損失であった。しかし宗教学以外では、十九世紀末当時の一流の知識人たちが心霊研究に関心を抱き、この主題は「例外的に空前の規模で論争の的」となり、その遺産は今なお「生きた」問題として私たちの目の前にある。つまり「宗教学の研究にとって格好の状況は失われたのではなく、継続している」、ならば問われるべき問題は問われなければならないのではないか——。

確かに著者の述べるように、十九世紀末から第一次大戦後にかけて、欧米（あるいは日本でも）死に関する議論が流行し、ハイデッガーの哲学が出現した一方で、霊媒による霊界通信をもとに死後存続の可能性が真剣に議論されていた。ジェイムズ、ベルグソン、ロッジといった当時の指導的知識人が心霊研究を真面目に取り上げたことなどはここで繰り返すまでもない。ただし〈霊〉という主題についての研究史についてはいささか補注を加えておくとすれば、スピリチュアリズムを含めて歴史的なオカルティズム研究は一九七〇年代からアカデミックの内や外で始まっており、James Webb, *The Occult Underground* (Open Court, 1974) など、現在の秘教（esotericism）研究の直接の先駆となる著作がいくつか出版されている。スピリチュアリズム、心霊研究に限っても、アメリカを中心に研究が活性化した時期があり、文学史の立場から書かれたHoward Kerr, *Mediums, and Spirit-Rappers, and Roaring Radicals* (University of Illinois Press, 1972) や心霊研究から超心理学



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の成立までを追ったR. Laurence Moore, *In Search of White Crows* (OUP, 1977) といった先駆的研究が出ている。八〇年代に入ると、心霊研究家の包括的な精神史を描き、本書でも何度も引用されているJanet Oppenheim, *The Other World* (Cambridge University Press, 1985)〔邦訳 和田芳久訳『英国心霊主義の抬頭』工作舎、一九九二〕、女性史の観点から十九世紀アメリカの女性霊媒の政治学を論じて、女性史におけるスピリチュアリズム研究の位置を確立したAnn Braude, *Radical Spirits* (Beacon Press, 1989) といった重要な研究が出現している。九〇年以降の書名については省略するが、数年ごとに研究書が出版されており、一見すると比較的活況のように見える。ただし研究書の多くはアメリカ学、女性史からの歴史叙述であり、宗教学という点からすると物足りなさは否めない。その点では、シェイカーから神智学までの霊的思想運動を論じたRobert Ellwood Jr., *The Alternative Altars* (University of Chicago Press, 1979)、あるいはメソジスト、スピリチュアリズム、ウィリアム・ジェイムズと幅広く霊的経験に関する言説を再解釈したAnn Taves, *Fits, Trances & Visions* (Princeton, 1999) などが目につくばかりであり、〈霊〉という問題を改めて問い直した研究は決して多いとはいえない。こうした現況からすれば、臨死体験や輪廻仮説について、真正面からその意味と価値を解釈しようとした本書は、決して英米の歴史書の要約に終わらない独自のものである。さらに言えば、比較的洗練された高等スピリチュアリズムを対象としてではあるにしても、スピリチュアリズムを歴史現象としてではなく一個の宗教思想として真正面から評価しようとした点では本格的な宗教学的研究といえよう。

さて、「はじめに」の紹介から本書の研究史的意義にまで話は及んでしまったが、ここで改めて本書の構成を紹介しておきたい。本書は別々の題材を扱いながらゆるやかに関連する六つの章からなっているので、それぞれの題目と内容を簡単にまとめておく。

序章 「近代スピリチュアリズム」という事件
——主題のスケッチ

ここではスピリチュアリズムに関して全般的な解説が与えられている。スピリチュアリズムの発端となったとされるハイズヴィル事件、交霊会の流行、心霊研究協会（SPR）創立、ビクトリア朝知識人たちの反応、日本への影響、シャーマニズム研究との関係などのトピックが扱われている。そして著者は、その多様な運動の中から「高等スピリチュアリズム」と呼ばれる「倫理的、哲学的に高度な」教えに焦点を絞るとする。本書では、アラン・カルデック、マクドナルド=ペイン、モーリス・バーバネルなどの霊媒による霊界通信が取り上げられるが、中でも本書で主に引用されるのは、オックスフォード大卒業という当時の霊媒としては珍しい出自のステイトン・モーゼズの『霊訓』である。

1章 比較宗教学と近代スピリチュアリズム
——ミュラーとモーゼズのニアミス

本章では副題に示されたとおり、そのモーゼズとマックス・ミュラーとの類似と相違が論じられる。ほぼ同時代を生きた霊



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



媒と宗教学者という、かなり異質な組み合わせながら、いずれも、古代宗教の中に共通する真理の存在と、その真理が夾雑物によって覆われているという点では共通している。しかし死後存続については、スピリチュアリズムでは教説の眼目となし、ミュラーはもはや声高に主張する必要もないほどに確信している。またミュラーの自然宗教の立場からすれば、重要なことは神の大きな奇跡である自然（とイエスの歴史的な生涯）であって、心霊現象のような小さな奇跡は意味がないとされる。

2章　〈霊〉という主語――『霊訓』の対話から

霊として語りだす存在が、人間の側の思考なのか、人間の外にいる他者なのか。モーゼズの霊界通信それ自体における〈霊〉の自己理解では、スピリチュアリズムの〈霊〉が曖昧さを含みながらも霊媒の他者として存在しているのに対して、心霊研究では霊的現象が人間の側の潜在的な一部として解釈される。前者は霊魂仮説と呼ばれ、後者では生者の超心理能力を拡大して心霊現象が解釈されるので超ESP仮説などと呼ばれるが、著者は後者を人間中心主義の拡大、「ヒューマニズムによる信仰世界の植民地化」と捕らえており、人間中心主義のオカルト研究家の代表格であるコリン・ウィルソンが『超オカルト』（一九八八）以降、霊の実在説に転じたことを指摘して、その難しさを指摘している。

3章　臨死体験が問いかけるもの

――「マイヤーズ問題」の回帰

「マイヤーズ問題」とは、十九世紀の代表的心霊研究家F・W・H・マイヤーズの設定した問題を、その死後にウィリアム・ジェイムズがまとめたもので、その問題の射程には単なる潜在意識（サブリミナル）の領域における心霊現象作用だけでなく、人間の死後存続の可能性までが含まれている。それは霊魂仮説へも超ESP説へも転びうる「両刃の剣」である。それらの心霊研究とキューブラー=ロス、オシスとハラルドソン、ムーディなどの現代の臨死研究を比較すれば、迂回してきたマイヤーズ問題へと回帰しているのではないかと著者は主張する。そして最後に「生」を至上の価値としない、「死」とその彼方に軸足を置いた倫理の可能性が指摘される。

4章　現代の輪廻神話――不可視の知性が語る倫理

ジョエル・L・ホイットン、ブライアン・L・ワイスという現代の前世療法から、エドガー・ケイシー、シルバー・バーチの通信、「マイヤーズ」を名乗る〈霊〉の唱える輪廻説、フランス・スピリチズムの祖であるアラン・カルデックへと時代を遡行しつつ、それぞれの輪廻説が論じられる。中でも「マイヤーズ」という霊の説くそれは、「類魂」という霊魂の共同体が死後に待っているとされ、個人霊の死後存続説と大霊への融合説を調停させるものとして評価されている。本章でも3章と同様、著者が注目している点は輪廻思想に付随する倫理思想にあり、カルデックに見られる「公正」性や、輪廻説に一般に見られる「賞罰的な思想の上に魂の進化という教育的な発達論」に、その特徴が見られるという。

終章　近代スピリチュアリズムの帯域

――神智学その他と対照して

スピリチュアリズムとオカルティズムが、当事者の間でどの



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ように相互を規定（あるいは批判）し合っていたか、人智学のシュタイナー、実践魔術のダイアン・フォーチュン、そしてモーゼズというそれぞれの陣営の代表者が語るところを論じている。オカルティズムが、隠れた法則を熟知した意識的な達人（アデプト）によって現象が起こされるのに対して、スピリチュアリズムは霊の側に重点が置かれ、より大衆的であるとされる。この差異は、そのままシャーマニズム研究におけるエリアーデの脱魂型シャーマンと憑依型シャーマンの区別に重なり、脱魂型はカスタネーダのようなアカデミズムから出た実践と結びつきやすいと指摘している。ここでもスピリチュアリズムとオカルティズムの実践においてもたらされる倫理的結末が論じられている点には、やはり著者の視線がはっきり表出されていて興味深い。

本書の全体を通観してみれば、ばらばらのトピックを論じているように見えながら、その問題意識は一貫しており、つまるところ本書は、霊的現象における〈霊〉実在説と人間中心説の相克をめぐって、いくつかの土俵をめぐりながら問題を論じていると要約できよう。とりわけ「マイヤーズ問題」は、宗教学説史に照らし合わせてみれば、ウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』の結論に影響を及ぼし、そこから二十世紀初頭における宗教心理学における潜在意識起源説の興隆につながり、その意味ではジェイムズやマイヤーズの意図とは裏腹に、むしろ心理還元説、合理主義的解釈へとつながっていった。本書の功績は、マイヤーズの主張を、それが問題であった時代へと引き戻すことで、アクチュアルな問題設定として蘇らせた点にあるだろう。あるいは随所で論じられる死後生と実践倫理の関係も、十九世紀末においては盛んに論じられた事柄であり、現在もなおそのアクチュアリティを失っていない。そうした倫理問題への真正面からの捕らえなおしも、公共宗教論を研究の一方のテーマとしている本書の著者ならではであろう。

さらに秘教史的な視点からすれば、オカルティズムとスピリチュアリズムの別という、日本では周知とはいえない区別について、本書では何度も論じられており、今後の研究がずいぶん容易になったともいえる。しかし、スピリチュアリズム側に視点をおきつつ、その区別を強調するあまりに、多少、気になる点も出てこないではない。最後に歴史的観点から二つの点について触れておきたい。

一つはエリアーデ宗教学の傾向についてである。エリアーデのシャーマニズム研究が、ドラッグの扱いをめぐって、ストイックな態度を取っていることはよく知られている。またその脱魂型シャーマニズムへのこだわりも周知のとおりである。「心霊学は実験科学の規準を導入して、霊魂の存続を、物理的顕現によって証明しようとする。触知可能な証拠という固定観念、科学から生まれた迷信」（一九六二年十一月二九日付『日記』）とあるように、スピリチュアリズムへの否定的態度も強い。評者も、本書で指摘されたエリアーデのオカルティスト的傾向についてはまったく同意見である。若い頃より心身の意志的統御が彼のオブセッションであり、インドでは性的ヨーガの実践も行なっている。あるいは「ホーニヒベルガー博士の秘密」のよ



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



うな幻想小説には、近代オカルティズムの書名が多数引用されている。さらに言えば二十世紀初頭から大戦間にかけて、フランスのルネ・ゲノン、イタリアのユリウス・エボラのように神智学などの近代オカルティズムを批判しつつ、東洋宗教や古代魔術への準学問的研究へ向かったアカデミシャンと実践家の間に位置する人々がいた。いわゆる伝統主義者と呼ばれる人々であるが、エリアーデはエボラとの生涯に渡る交流が示すように、そのような陣営に属すものと目されていた。そのような背景からしても、エリアーデの「オカルティスト」的傾向は明らかではある。ただ、前半生は東欧の小国に属し、後半生は亡命者として生涯を送ったという彼の歴史的限界を考えれば、問題は必ずしも彼個人の思想の傾向性だけには還元できないようにも思われる。

第二には、モーゼズについてである。彼は確かにスピリチュアリストとして扱われているが、しかしJocelyn Godwin, *Theosophical Enlightenment* (State University of New York, 1994) によれば、モーゼズはメーソン会員で英国薔薇十字協会に属し、神智学協会のH・S・オルコットやチャールズ・マッシーと親しく文通を続けていたという。ゴドウィンは、モーゼズのインペレイターという〈霊〉にしても、神智学草創期にブラヴァツキーやオルコットの背後にいたとされる神話的な「ラクソー同胞団」のマスターと同様の超越的存在ではないかと指摘している。このように、オカルティズムとスピリチュアリズムの境界線は、現在から考えるほどには判然としていなかったのではなかろうか。さらに考えれば、超越的存在に死者霊をもってすることは、人間中心主義の延長ではないかとも言えるのではなかろうか。この区別についてはさらに論考を重ねる必要もあるかと思う。

さらに宗教学という点に関しては、原始一神教説と心霊研究によって宗教発生論を構築しようとしたビクトリア朝の文芸批評家アンドリュー・ラングの功績、あるいはスピリチュアリズムとオカルティズムの別に関しては現代の秘教史研究者ハネグラーフの構築した概念枠組みとの比較など、さまざまな問題が派生してくるであろう。しかし、以上のような重箱の隅をつつくような問題は、ないものねだりに類することであり、また、本書の著者の目指すところではあるまい。むしろ大づかみで事態の本質に肉薄する洞察力こそが著者の本領であろう。本書によって近代の〈霊〉に関する思想について、研究者の指針となる幹線道路を構築し、現代の問題と切り結ぶプラットフォームを用意されたことを多とし、これを起爆剤として他の研究が続いて出ることを望みたい。



NII-Electronic Library Service